7　まとめ

1　興福寺伽藍中枢部の平坦地は、大規模な寺地造成によって形成されたことが指摘されてきたが、中門地区に関しても、その東半部で地山の切り土による造成を確認した。

2　中門基壇の遺存状況は良好とはいえないものの、計３基の礎石が基壇上に残り、抜き取り穴を含め礎石位置を確定することができた。このことにより、従来文献・絵画資料および地表観察にもとづいて検討されてきた中門の平面規模が明らかになり、中門の建物が、桁行５間78尺、梁行は２間28尺であったことが判明した。『興福寺流記』に、中門は「長七丈八尺、広二丈八尺」、桁行の柱間は「五間」とあり、これと一致する。興福寺の度重なる再建の特色のひとつに、奈良時代とほぼ同じ規模を踏襲して、それぞれの建物の復興をおこなってきたことが指摘されてきたが、中門についても同様のことがいえる。

3　基壇北側外周の遺構は遺存状態が良好であり、基壇および基壇外装について大きく５期に区分される改修・重複のありかたを確認した。確認した最下層Ｂ期の基壇外装は凝灰岩による壇正積基壇である。遺構の状況および出土遺物から、中門・回廊あるいは中金堂院について知られる罹災と再建の経過に照らせば、Ａ期を創建期、Ｂ期を永承から治承再建期、Ｃ期を建久再建期、Ｄ期を応永再建期、Ｅ期を享保の火災以降に対応させることができる。

4　中門の安置像については、文献および絵画資料から知られていたが、従鬼像台石SX7424が原位置で発見されたことは、安置像のありかたを検討するうえで重要な材料となるといえる。

第26図　上空からみた興福寺の伽藍と調査地